

---

# ありふれた日常

ウィード

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ありふれた日常

### 【Zコード】

Z2103D

### 【作者名】

ウイード

### 【あらすじ】

巧<sup>たくみ</sup>は高校生活に期待を抱いて公立の名門校に入学した。あなたは高校生活に何を感じ、何を思うか? 巧に投影して考えてみてください。ありふれた日常を描くかけがえのない輝く季節。

## 入学と期待

学校へ伸びる直線。

一本入ると大通りに出るような道は不思議と静かだった。  
やわらかな風が巧<sup>たくみ</sup>を撫<sup>なで</sup>るよう<sup>に</sup>吹き抜け、適度な涼しさを<sup>与</sup>える。

「ふう…」

何の氣なしにため息をつく。

心地良い疲労感と目的の達成が間近にある期待感からこぼれたため息。

巧は高校生活に期待している。

現に今も軽い足取りで高校へと下見に来ている。

正門には高校の名が名門たるを主張するかのように佇んでいて、巧にこの高校に入る実感を湧かせた。

フェンスに囲まれた校庭では生徒達が部活に汗を流し、掛け声を響かせている。巧は軟式野球部に入ると決めていた。

高校紹介には、関東大会出場の軟式野球部などが活躍している」とあり、それも期待の一因だった。

### 入学式当日

巧が昇降口に向かうと明らかに困っている雰囲気の男子生徒が居た。自分の番号が何番か書いてある表でも忘れたのだろう。

「あのー…俺、自分の番号<sup>ばんごう</sup>忘<sup>わ</sup>れちやつたんだよねー…番号<sup>ばんごう</sup>の紙見せてくれないかな?」

おずおずとその生徒は話しかけてくる。

やつぱりか。

「オッケー!」

巧は軽い調子で言い男子生徒に表を渡す。

「あ<sup>い</sup>りがとーえ<sup>い</sup>つと…俺、瀬戸<sup>ひ戸</sup> 洋<sup>ひろ</sup>一<sup>イチ</sup>ヨロシクー!」

先手を取られたな。

大体オレから自己紹介するんだけどな。

「小河原 巧。宣<sup>くわん</sup>しく」

儀礼的なまだぎくしゃくした挨拶を交わし、巧は右手を差し出す。

瀬戸は巧の右手をしつかり握り笑つて言つた。

「ヨロシクなー!」

瀬戸は気持ちのいい朗らかな笑みを浮かべている。

巧は安心した。

活発なヤツがないんじやないかと心配していたからだ。

教室の席に腰を下ろして巧は安堵のため息をついた。

とりあえず入学式から友達が出来て良かった。

巧は中学でも友達はかなり多い方だったが、それは小学校からの付き合いのヤツが沢山いたからだ。

巧は人付き合いは上手い方だと自負していたがやはり心配だった。

教室には続々新入生が入つて来ていて席が全て埋まった頃、先生だと思われる優しそうな落ち着いた雰囲気の男性が入ってきた。

教室は静寂に包まれる。男性の靴音がやけに大きく聞こえる。

「皆さん、おはよつゝぞこます。そして入学おめでとつゝぞこます。

皆さんは

」

入学式の説明を先生から聞き、体育館に向かった。体育館からはざわめきが聞こえ、抑制された会話が溢れていた。

「 それでは新入生が入場します。拍手でお迎え下さい。」

体育館が一瞬静かになつたかと思うと次にはまとまりのない拍手でいっぱいになつた。

顔が紅潮する。自分に注目が集まるわけでもないのに。

列が動き出した。

この高校は女子が先である為に巧は男子の中では前だがクラスとしては後ろの番号だ。

前の男子に引かれるように機械的に進んで行く。  
足が自分のものではないかのように感じる。

心拍数が上がり鼓動が直接肺に当たっているような感じがして息苦しい。

体育館の中に入ると時折焚かれるフラッシュが巧を迎えた。

巧は奇異の視線に晒されているような感じがして口元が緩んでしまった。

パイプ椅子に腰掛け、莊厳な雰囲気の式の進行をあたかも真剣に聞いているような風を装いながら巧は期待に胸を膨らませていた。

……不謹慎だとは思つが前の女子の中にまだ後ろ姿だけだが好みの女子がいる。

「眞さんはチームとしてだと誇りを持つて」

校長先生が話しているが断片的にしか耳に入つてこない。  
巧の期待は更に膨らんだ。

式終了

巧は僅か20分足らずの入学式にも疲労を感じた。やはり神経を使うのだろう。

「小河原！弁当食べようぜ！」

瀬戸が元気良く話しかけてきた。

「ああ！」元気良く答える。

「志村も一緒に食べようぜ！」

巧は瀬戸の前の席のクールな感じの男子を呼んだ。

巧の友達の友達が志村で昨日の招集日に既に言葉を交わしていたのだ。

志村は振り返り笑いながら言った。

「ああ、でも集まつて食べるのはオレらだけだな」

「そうだな」

巧も笑つて返す。

「あれ？お二人友達？」

瀬戸が弁当を持って二人の顔を交互に見て言う。

「ああ」

「まあな」

二人は顔を見合わせて言う。

「俺、瀬戸 洋！ヨロシク！」

瀬戸が人懐っこい笑顔で言づ。

「オレは志村 賢。宣しく」

志村も思わず笑顔になつて言づ。

瀬戸の笑顔は人を幸せな気分にするよつた効果があるよつだ。

「矢野ーー」つち来て一緒に食べない？」

瀬戸が窓側後方の男子を呼んだ。

「俺と矢野は来る途中に話したんだ！明らかにこの生徒つて分かつたからな！」

瀬戸が説明するのをその男子はニコニコ笑つて聞いていた。

凄い行動力だな。

巧は純粹にそう思つ。

「矢野 慶！宣しく！」

優しい爽やかな雰囲気を持つてゐるな。巧はそう思い、ふと周りを見渡した。

巧達以外は皆自分の席に座り静かに食べている。さながら受験会場

の昼食時のようにだ。

力チャカチャと箸の音が響き、自分達が場違いのように感じる。しかしそんなことはおかまいなしに四人は机を並べて弁当を広げ談笑を始める。

「アド交換しようぜー。」

瀬戸が携帯を高々と掲げて言つ。

「オッケー！」巧も続き、四人で交換した。

アドレス交換も終わりそれぞれの中学のネタを話していると…

「そいつあだ名がファンキーモンキーとか猿だとかさー！松屋で卵だけ買つていきなり立たせて『コロンブスを超越したつ！』とか言つた時は笑つたなー！画像あるよー！ホラ…」「あの…」

巧に後ろから声がかかつた。

振り向くとそこにはすらりとした長身に鼻筋の通つた端正な顔。艶のある長い黒髪に透き通るような白い肌。

あの入学式の美人がいた。

「そこ…荷物取つていいかな？」

「え…あー勝手に借りて、ゴメンーすぐ退くからじょっと待つて！」

巧は入学式以上に顔を赤らめ慌ててその場から逃げ立つ。

「え……そういうわけじゃなくて……荷物出したいだけだからまだ使っててもいいって……」

黒髪の女子も慌てて説明する。

「ハイ。」

志村がひょいと女子の鞄を取つて渡す。

「あ……ありがとうございます。」

黒髪の女子が他に行つてしまつてから瀬戸が口を開いた。

「早くも矢印が生まれたか……」

腕組みをして考え込むようになつた。

「は？」

巧は意味が分からず聞き返した。

「いや……だからさ。小河原女子苦手だろーーあんなに慌てちゃつて  
うん? もう既に恋愛対象かーー」

瀬戸が突然饒舌になつて巧の肩に腕を回しあくし立てる。

「はー? ち……ちがーよーそんなわけ……」

巧は顔を上気させ必死に弁明する。

「小河原君……僕も彼女は良いと思つたよ……健闘を祈る。」

「ん」

「頑張つて！」

瀬戸の芝居かかった言葉に志村と矢野が続く。

「い……いや、だからちがうつて！」

何で入学式当日にいきなり恋愛話始まるんだよ。巧の心の叫びは届かない。

静かな教室に響く四人の笑い声。

場違いだとは思わない。それが学校の有るべき姿だから。

四人は既に打ち解けた友達のよつな様相を呈している。

巧は笑いながら言葉に出さず思つ。

・三年間よろしくな・

高校の忙しい日々が始まる。

## 喧騒と不安

午後は部活のオリエンテーションだ。  
説明と共に各部活、研究会が新入部員確保の為にアピールする場で  
もある。

「小河原はどの部活に入る?」

「オレは野球部だな。瀬戸は?」

「野球部か…俺も中学やつてたよーでもラグビー部にするわ!」

瀬戸が悪戯っぽい笑顔で言ひ。

「何でだよ!」

「志村と矢野は決まってるの?」

瀬戸は巧の質問をちらりとかわし、一人に聞く。

「サッカー部。」

「バスケ部!」

志村も矢野も即答した。

部活を最初から決めてくる人が多いのだろうか?

「そつかー!一緒に部活はまだないかー」

瀬戸が残念そうに言ひ。

「瀬戸なら大丈夫だ。出会つて五分で友達だ」

「そうだね」

「同感。」

巧が必ずしも励ます意ではなく言つ。

矢野と志村も続く。

「何だそれ！」

瀬戸が笑いながら言つ。

時計を見ると一時になろうとしていた。

「そろそろ時間だし体育館行かない？」

「おうー！」

「ああ。」

「そうだな。」

ちなみに上から矢野、瀬戸、志村、巧の順。

話し方一つで印象が決まり、人柄が分かる。

さつきの女子も……。

巧の思考が違う方に行つた。

……それはさておき、体育館には既にかなり多くの生徒が集まつていた。

人の発するムツとした熱気が伝わつてくる。

四人はA組だ。

所定の場所に座り、配られたパンフレットをめくる。

「……何でお前がオレの横に居るんだ。番号順だろうが。」

巧の苗字は小河原、瀬戸とは離れている筈だが何故か瀬戸が左に居た。

のみならず更にその左には志村、矢野が続いていた。

「大丈夫だつ！」

「問題ない。」

「いいのかな？」

瀬戸が唯我独尊。

志村は冷静に。

矢野は心配そうに言つ。

絶対番号の違う四人が横一列を占拠したお陰でおそらく他の男子生

徒に混乱が起きていく。

でもそんなの関係ねえ！！！

……取り乱した。

「では部活紹介オリエンテーションを始めます。まず最初は」

時折笑いありの賑やかな雰囲気のなか各部活がアピールしていく。

四人の中で一番早かつたのは巧。

軟式野球部の紹介だ。

「次は軟式野球部の紹介です」

「野球部じゃん！」

瀬戸はちゃかしたように言つ。

照明に照らされていない舞台に誰かがいる。

「千一！千一！千三……」

まず短時間では有り得ない本数で素振りをしてくる。

観客からは申し訳程度の笑い声が上がる。

「……滑つた。」

舞台上の人々が残念そうにうなだれる。……失笑。

「変な人だな」

瀬戸がぼそりと呟く。

「リアクションに困るな。とつあえず名譽の為に笑つてやるわ。」

志村が労るよつに言つた。

「えー！野球部は去年は弱…あまり強くなかったですが今年は期待できます！宜しくお願ひします！」

……は？去年弱かつたつて…各学校の受験用の書籍には確かに都大会出場の軟式野球部……

「小河原が強くすりやいいじゃん」

瀬戸が事も無げに宣つた。

「オレ一人の力はあくまで個人にしかすぎないし万能じやないんだよ～それなりに周りもしつかりしてないと…チームプレーだからな」

「おー・サッカー部だな！」

移り変わり激しいな…。

「志村、サッカー部だな。強豪らしいし期待できるんじゃない？」

「そうだな。」

サッカー部は先輩らしきかなり明るい茶髪の人が舞台袖で唯一言。

「ホントに全国目指す奴以外いらねえ。」

そして舞台裏に消えていった。

会場は反響にざわめく。

「き……厳しそうだな」

瀬戸が珍しく述べと申す。

「そうだな。期待できる」

志村は先輩の消えた舞台裏を見つめたまま言った。

「次は男子バスケット部の紹介です。」

放送が響き、観衆はざわめきを消す。

「やつとバスケ部か！隨分後だなー」

巧は待ちくたびれたように矢野に言った。

「いやー無いのかと焦つたよー！」

矢野が嬉しそうに言つ。

「バスケ部は皆楽しく力を合わせてやつてます！宜しくお願ひします！」

簡潔な紹介だ。何時間も椅子に座つぱなしで話を聞いてる方には  
ありがたい。

見越しての紹介だろ？

「よせそつだな！」

瀬戸が肩を叩いて言つと矢野は嬉しそうに笑みを零した。

「次はラグビー部です」

「やつとかー！首が痛いな！」

瀬戸が首を回しながら言つ。

「あ～…ラグビー部は月曜オフでその他は練習があります。皆さん  
の力が必要です！お願いします！」

「いぐらでも貸してやるぜー！」

瀬戸が明るく言つ。

「頑張れよー！」

巧は瀬戸と肩を組んで言つた。

「おー！」

「…」これで部活紹介オリエンテーションを終わります。各部活の説明会はこれよりすぐ、冊子参照のクラスにて行われます

放送が入りざわざわと人が動き出し、人の波ができる。

四人は人波を避けるように端に寄つた。

「ひとまず… 分かることになるな。」

「皆部活違うしな」

「そうだねー、じゃあ昇降口で終わり次第集まらうか

「了解！」

四人は出入り口に歩いて行つた。

人が廊下を埋め尽くしていく進みにいくつこの上ない。

「ヤベェな

巧が三人に声を掛けた。

…時には既に遅かった。

## 喧騒と不安（後書き）

これから年末、クラコンや野球部の遊び、中学校の人との遊びなど少し浮かれるような時期に入ります！更新が遅れるようにならないよう努力します！何卒ご容赦下さい。しがない高校生ですが宜しくお願いします！

廊下は人の波が出来ていた。

更に……

長めの黒髪のカツコいい先輩が。

「バスケとかどうー? 君なら歓迎するよ!」

少し茶色がかつたショートの女の先輩が。

「ラクロス部のマネージャーなんてどうかな? 可愛い子沢山いるよ  
ー!」

見ると瀬戸が手を引かれ

「まざいー! 瀬戸を連れ戻せ!」

志村が声を上げた。

瀬戸は向いつの世界に行く寸前で戻ってきた。

「全く……ラグビー部に入るんだろ? しつかり誘惑をかわせよ。」

「悪い悪いーちょっと見てみようかなーなんて思つたり……う

ウソウソ！冗談だつて！」

志村の刺すような眼光にうろたえ、慌てて取り繕う。

「これじゃあそれぞれの紹介の場所に辿り着くのが大変だね。」

矢野が一人のやり取りを見て笑いながら言つ。

「ヤベえつて！勧誘激しいし！」

「勧誘禁止区域の階段から行こうぜ」

巧が冷静に言つ。

「ラクロス部ズルいぜ、ホントに可愛いんだもんな」

瀬戸が名残惜しそうに引かれた手を見ながら言つ。

「変態が」

「全く…」

「まあ…確かに」

「何いいいいいつ…！…！」

巧は野球部の説明会が開かれる扉の前に立っていた。

と

「君、野球部見に来た?」

後ろから声が掛かった。

振り返るとユーフォームを着込んだ先輩が期待のこもった目で見ていた。

「はい」

「じゃあこっちね!」

皆まで言わないうちに先輩の後ろにいたマネージャーさんに腕を掴まれ部屋へと拉致…入った。

部屋には既に3、4人の生徒が思い思いの場所に座っていた。

「適当なとこ座つて、簡単なアンケート渡すから。他の人と喋つてもいいから!」

「はい」

アンケートに答えつつ巧は周りを観察した。

教卓の前に体格の良い生徒がいた。

一通りアンケートに答えると巧はその生徒に話しかけた。

「ポジションは？」

「えつ…ああ、元はキャッチャーでピッチャーだよ。」

相手は少し面食らって答えた。

ピッチャーか。同じポジションだな。競争になるな。いや…競争なんて概念は昔からなかつた。

「そつか！オレもピッチャー。小河原巧、宣しく！」

右手を差し出す。

「オレは田野 裕介宣しく！」

ゴツゴツした幅広の手だった。

巧の薄い手のひらや細く、長い指とは違つ力強さ。

「オレのチームはピッチャーが途中で辞めちゃつてさー仕方なくオレがピッチャーになつたんだ」

「仕方なくで出来るのは凄いなー。オレは昔から投手一筋だったよ」

笑いながら答える。

と、先輩が教室に入ってきた。

巧は日野に会釈し自分の席に戻る。

「アンケート終わったかな？それじゃ、自己紹介始めます。えっと… まずオレから… 主将、氏家 将也（うじこえまさや）です。宜しく。」

長めの黒髪で色白の先輩を皮切りに自己紹介が始まった。

「小野高 悠史（おのだかひし）。宜しく！」

長身で爽やかな感じの先輩。

「細田 幹也（ほそたみきや）。」

身長低めの先輩…この人だ！オリエンテーションで滑った人は！  
巧は瞬時に理解した。

日野も理解したようだ。

背中が揺れている。

「違うだろお前は一ハギだろ！」

小野高さんがちやかす。

「ここでは本名だろ！」

細田…ハギさんが言い返す。

「はいはい。そんなのは後回しにして…じゃあ新入生に自己紹介してもらおうかな。じゃあ君から順に。」

巧が指された。

「ハグー… そんなのはないだろそんなの…」

ハギちゃんが暗にオーラを出しながら呟めしゃつて囁く。

「今は黙つとけ…自己紹介出来なこだろ。」

小野高さんが一蹴する。

「あの…いいですか？」

巧はタイミングが掴めず氏家さんに尋ねた。

「あ…いこよいこよー始めやつて」

氏家さんが横の謹ぎは物ともせぬ進める。

「はあ… 小河原巧。ポジショントレーナーです。宜しくお願ひします。」

先輩達に軽く会釈する。

おおーー!と後ろから感嘆の声が上がった。

振り返るとそこには三年生達が座り込んでいた。

「氏家、ピッチャーは確保だな。」

長めの明るい茶髪の先輩が言つ。

「そうですね…先輩は今年残つて頂けないんですか?」

「バーカ今年大学受験だから無理だろが。この学校は部活は基本的に一年まで三年生が残るかは自由なんだよ。」

「わうっすね…たまには練習顔出して下をいいよー。じゃあ…次お願ひ。

「

日野が立ち上がる。

「田野裕介っす。ポジションは元はキャッチャーでピッチャーもできます。簡単に言つてどどどでも守れます。」

おおーー!巧のときの数倍近い声が上がる。

「氏家ー!ピッチャーは安泰だな。」

「今年期待できるなー!」

自信に満ちた物言いだな。

それを口にするか、口にしないか。

そこの差がオレと日野にはある。

負けはしない。

巧は生まれて初めて競争、ライバル意識を持つ。

「それじゃあ部室を紹介しようか——じゃあ皆立つて~」

一通り全員の自己紹介が終わり、氏家さんについて部室へと移動する。

新入生の人数は巧含めて四人。

少ないな…まさかこんな少ない訳は…

巧は不安は現実となる。

「——」が部室——野球部全員で君たち含めて九人だね。」

校庭に面した校舎側の一室。

と窓から長髪でかなり明るい茶髪の人人が中を覗いていた。

氏家さんが応対する。

「…………。」

「…………イカついな」

日野が呟く。

「…………先輩か……?」

高校生活一日田は田滑に終わった。

「ふう……」

ため息と共にベッドに倒れ込む。  
スプリングが軋み、巧の体重を受け止める。

柔らかな感触が身体を包み、安堵感と心地よい疲労感が襲ってくる。  
友達ができた、野球部に入った…美しい子と一緒にクラス…いや、  
オレはそんな軽い男じゃない。

苦笑して巧は首を振る。

これからの中学生生活に自分は何を得るだらうか。  
糧として進めるだらうか。

…今考へても詮無きこと、今は唯、青春を謳歌しよう。

そう思い直して寝返りをうつ。

枕はそれに応じて形を変え、巧みに眠りへと誘ってくれる。

瀬戸、志村、矢野、日野、氏家さん、小野高さん、ハギ…さん。

楽しくなりそうだ。  
薄く笑つて目を閉じた。

帽子を被り直し、相手打者を見て軽く一礼。  
プレートに足を置き、直井のサインを見る。

…ストレート。

頷き、投球態勢に入る。左足を後ろに置き、両手をベルトの高さで  
合わせる。

グローブのなかでボールを握り直し、左足を振り上げる。

腰を捻り、右腕を下ろし、アンダーを作る。

いっぱいに踏み出した左足に体重を移動し、トップに腕を持つて行  
く。

ノーウインドアップモーションで、

しなやかに曲げたその腕から放たれたボールは

…マウンドで投げる自分の姿が浮かぶ。一年生ピッチャーとしてチ  
ームを牽引し、強豪を倒す。

そして何年振りかの都大会に導き、許すなら関東、全国に。エース

として。

四番として。投打の中核として。

自分の力が通用しないかもしないことは分かつてゐる。だが巧は今まで積み重ねた経験を誇りに思つてゐた。

巧は目を開けて起き上がつた。

机に向かい、右の引き出しを開けて写真を取り出す。

そこには

## 安堵と心理（後書き）

更新が遅れ、大変申し訳ありませんでしたm(ーー)m(汗)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2103d/>

---

ありふれた日常

2010年10月28日07時11分発行